

平成25年度



福山平成大学 公開講座

日時：9月12日（木）～10月10日（木）

全5講座 18:30～20:00

会場：福山平成大学7号館大講義室

テーマ

少子高齢化時代の生き方
～生きる力を育む～

第1講 9月12日（木）
高齢期を元気に生きる“こつ”
木宮 高代 准教授
（看護学科）

第2講 9月19日（木）
超高齢・少子減少社会に生きる
～住み慣れた中山間の自宅で最期を迎えたい～
佐藤 皓一 教授
（福祉学科）

第3講 9月26日（木）
異なる年齢層が参加する英語文学読書会の楽しみ
本田 良平 講師
（経営学科）

第4講 10月3日（木）
子どもの「学び」をとり戻し、「生きる力」を育む
～能力と内面活動の統一～
田中 道治 教授
（こども学科）

第5講 10月10日（木）
教育は純粋な贈りもの
～学び・労働から逃避する若者へのメッセージ～
小谷 寛二 教授
（健康スポーツ科学科）

申込期間：8月1日（木）～9月6日（金）

申込方法：別紙、受講申込ハガキに所要事項を記入の上、郵送または持参

受講料：無料

定員：250名

受講証：5講座中4講座以上の受講者に受講証を授与

申込及び問合せ先：庶務課

〒720-0001

福山市御幸町上岩成正戸117-1

TEL：(084) 972-5001

FAX：(084) 972-7771

※ 本学へお越しの際は、公共交通機関もしくは、自家用車等をご利用ください。

主催：福山平成大学

後援：福山市 福山市教育委員会 福山商工会議所 府中商工会議所

少子高齢化時代の生き方～生きる力を育む～

福山平成大学は、今日、相互に関連した3学部5学科を擁する大学になりました。しかし5学科の専門領域は異なり、それぞれ独自の専門教育・研究に取り組んでいます。日本は少子高齢化社会を迎えています。変動する社会において、それぞれの年代（子どもから高齢者）でいきいきと健康で「生きる力」を育むことは人間の課題かもしれません。そこで今年の公開講座では「少子高齢化時代」をめぐる問題・課題についてそれぞれの学科から独自のテーマを設定して、それぞれの立場から考えてみたいと思います。今秋も、地域に根ざした大学としての役割を果たすため、以下の5つの講座を開講します。

第1回 9月12日（木） 高齢期を元気に生きる“こつ”

木宮 高代 准教授（看護学科）

わが国においては急速に進む高齢社会で、経済的な側面ばかりがクローズアップされがちですが、最先端医療の研究が進み、これまで治せなかった病気に一条の光が差し込むようになってきました。一昔前には、夢物語であった「人生80年」という言葉が現実のものとなったのも、日本における高度な医療技術の発展が大きいといえます。

厚生労働省の調査（平成23年度簡易生命表）によると65歳まで生存する者の割合は、男性は86.9%、女性は93.1%、同様に、75歳までは男性は71.9%、女性は85.9%、90歳までは男性は21.3%、女性は45.5%が生存するという結果が示されています。同じ長生きをしても、病気に伏していたり、思うように動けないのでは、長生きの喜びも半減してしまいます。生きることを喜び、幸せに感じられる、そんな生き方を貫くには、やはり「元氣」がなによりも大切です。

世の中に、病気になる人はいません。しかし、なるべく病気になるように気をつけることは、だれにでもできるはずですが。今回の公開講座が「元氣」で「長生き」できる「こつ」につながり、受講者のみなさまの末永い健康のために、「人生100年」の幸せを支える一助になれば幸いです。

第2回 9月19日（木） 超高齢・少子減少社会に生きる ～住み慣れた中山間の自宅で最期を迎えたい～

佐藤 皓一 教授（福祉学科）

超高齢社会の到来、出生率の低下・少子化が叫ばれ、国の年金・医療をはじめとする社会保障制度の見直しが進められています。「負の財産を次世代に渡せない」といいながら、まるで高齢者の長寿が悪いような世代間対立を煽るコメントに心が痛みます。

平成23年に実施された人口動態統計結果を踏まえ、生産年齢人口（15歳～64歳）の年次変化や将来推計を基に、社会保障制度や地域の暮らしの影響について考察します。

こうした社会的変化の中で、生まれ育った地域・自宅で暮らし続けるための条件、とりわけ地方の市町村内で発生している生活基盤の崩壊がドーナツ現象として深刻化している点に注視しながら皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

第3回 9月26日（木） 異なる年齢層が参加する英語文学読書会の楽しみ

本田 良平 講師（経営学科）

本講では、地域住民の方々と行っている英語文学読書会での経験を、具体的なテキスト読解を交えてお話ししたいと思います。文学作品を読み解こうとすることは、自分とテキストの対話を深めることであり、その結果個々人が導き出す解釈には、自ずと「自分」が出てくることになります。個々人で違うその解釈を皆で話し合うだけでも楽しいものですが、ましてや世代の違う方の解釈を伺うと、自分だけでは気付くことの出来なかった視点から作品を見直すことができ、しばしばそれは新鮮な体験となります。こうした経験をお話することで、少子高齢化時代において重要性を増してくる世代間・個人間交流の一つのあり方を探ることができればと考えます。

第4回 10月3日（木） 子どもの「学び」をとり戻し、「生きる力」を育む ～能力と内面活動の統一～

田中 道治 教授（こども学科）

能力主義（テスト主義）を特徴とする学校教育のもとで子ども達は学びへの興味・関心をなくし、自信を失い、そして学ぶことから逃避し続けてきました。この詰め込み教育の反省から、協調性や思いやりの育成をねらいにした「心の教育」が強調されました。しかし、不登校・いじめあるいは教師の一方向的教授活動は年々増加しています。子どもの学びを再構築するのは、今です。本講座ではアメリカ合衆国エール大学（心理学科）との共同研究を中心とした学びに関する発達モデルに着目し、「できる」「わかる」という能力的側面と、「やってみたい」「目標に向かう」「やり方の工夫」といった内面活動との結びつきを考察し、併せて教育指導の方向性を探ります。

第5回 10月10日（木） 教育は純粋な贈りもの ～学び・労働から逃避する若者へのメッセージ～

小谷 寛二 教授（健康スポーツ科学科）

教育とは純粋な自然の贈与であると言われていています。換言すれば教育の価値を意味づけ、人と人とを結び合わせ、絆を深め、世界を共に切り開いていく惜しめない無償の行為です。教育がどれだけ大きな価値を生み出すのか、身にしみてわかっているはずですが。しかしながら教育サービスを貨幣と『等価交換』とみる子ども・若者そして親が、自分にとって都合の良い利益や利点に終始し、不快なことについては無関心で、学ばないこと、労働しないことを誇らしく思い、正当化し「オレ様化」してきています。予測がつかない経済より教育に力を発揮しなければ、日本の将来はありません。東日本大震災以後、大変な数の人々が犠牲となり、日本は深刻な打撃をこうむりました。今こそ、私塾の思想を持ち、教育にすべてのエネルギーと才能を集中しなければならないと考えます。